

## 魏紹昌編『吳趼人研究資料』について

中 島 利 郎

魏紹昌編『吳趼人研究資料』（1980年4月上海古籍出版社、以下『資料』と略称）は、文化大革命以前、1962年に中華書局より刊行された『老残遊記資料』、『孽海花資料』（共に魏氏編）に次ぐ、清末小説研究者待望の資料集である。これに続いて出版された『李伯元研究資料』（1980年12月上海古籍出版社）と併せて、所謂「清末四大小説家」の資料集が出揃ったことは、まことに慶賀の至りといえよう。また文革以前刊行の両資料が初版それぞれ一千部と、発行部数も少なく在日研究者（のみではないかも知れぬが）には稀覯の書に属していたのに対して、呉・李の両資料がそれぞれ一万部、六千部と比較的多く発行されて入手しやすいことも有難い。

さて『資料』の内容は、劈頭に魯迅『中国小説史略』中「清末の譴責小説」の一節をひき、続いて吳趼人の手跡を含む図版18図を置く前言部、および上下二巻に分かった本編部からなる。全369頁。

本編上巻は伝記部分。魏氏自らが詳細な箋注を施した魯迅『中国小説史略』中の吳趼人伝記部分および李葭榮「我仏山人伝」を筆頭に周桂笙、胡寄塵、徐枕亜、許嘯天等、吳趼人とほぼ同時代に生きた11名の人々の「同輩回憶録」よりなる。下巻は作品部分。「長篇小説」「短篇小説」「筆記」「小品」「戯曲」「詩」「雑著」「編校・評点」の八類に分かれたれ、それぞれの作品ごとに、回目、篇目、序跋、原文節録、参考資料類が附されている。

まず上巻で目をひくのは、魯迅『史略』中の吳趼人伝記部分への魏氏箋注である。日本においては未見の趼人自身の作品および資料類を引き、更には趼人の肉親、知友等からの聞き書きにより、我々にはうかがい知れなかった趼人伝

の不明部分を明らかにしている。たとえば、趸人の上海移住期に関しては、従来包天笑等の文章により20歳前後とは推測されていたものの、不明確な部分であった。だが、魏氏は趸人の『趸塵筆記』中の「星命」の一条に、癸未(1883)の年、趸人が上海に寓居していた叔母と共に大晦日を過したとあることから、趸人が故郷の広東南海仏山より上海に移ったのを、17・8歳の頃と比定されていること(箋注4)。また、趸人の死に関しては、江南烟雨客の「吳農絮語」(『江蘇研究』月刊第卷第3期合刊2・3号, 1937.3)より「庚戌の春、喘息を患って、九月十九日上海に客死した」との一節を引き、これに趸人の娘吳錚錚がその母(つまり趸人の妻)馮宝裕(1871~1944)を追憶した時の聞き書きとして、以下のように附注する。

九月十九日は、ちょうど乍浦路多寿里から海寧路鴻安里の新居へ引越してあったが、午前中に転宅が終った後、親友たちが祝いのために集ってきて、その宴で趸人は飲酒歓談してたいへん楽しんだ。しかし、今度の転居でたいへん疲れており、酒宴が終るや趸人の妻は早く寝むように勧めたが、なんとベットに入るや喘息の発作を起こし、医者を呼んだがもうだめであった。(箋注15)

以上のことから、趸人は死の当日新居に移転したこと、移転祝いで友人たちと飲酒歓談したこと、そして移転の疲労により、喘息の発作を起こし、その日のうちに急逝した、という新たな事実がわかる。また、肉親からの聞き書きということにも由来するのだろうが、死の直前までの趸人と友人たちとの歓談やさんざめき、そして新居にて一晩も過ごすことのなかったあっけない死と、その場の慌しい様子が眼前に彷彿するようである。これを従来我々の知る趸人にまつわる記述と比較するならば、おもしろい。李葭榮の「我仏山人伝」は「ついに喘息の病で、この年の九月十九日上海の旅寓にて死んだ」とのみ記していて、長わずらいの末に死んだようにも思えるし、杜階平の「談屑」の記述に至っては「四十四歳でなくなった。彼のポケットの中を調べてみると、わずか小洋四角の銭があっただけだという」とあり、趸人は孤独と清貧の中にうらさみしく死んだようにもとれるからだ(両論は共に『資料』上巻収)。記述のしかたにより、こうも印象が異ってしまうのには、些か考えさせられる次第で

ある。また、跗人の妻は馮姓であり、跗人の没した年に6歳になった娘のいたことはわかっていたが、上述の如く両者の姓名が共々記され、そのうえその娘がすくなくとも文革以前までは健在でいたことが明らかにされたことも、上述の附注にみえる跗人の死に関する事実に加えて、わたしにとっては新事実といえる。

甲辰（1904）の年、跗人が山東に旅行をしていることは、既見の『我仏山人札記小説』中などの記述に見え夙に知られてはいたが、何ゆえ山東まで出向いたのかは不明であった。この点に関して魏氏箋注は、跗人生前の知友の一人銭芥塵の言を引いて「跗人は当時黄河河工局の現任官に就任していたから（山東）に赴いたのだが、官場の生活になじむことができず、三ヶ月ぶらぶらした後上海に帰って来た」と意外な資料を提供する（箋注8）。呉跗人は、官場には近づけどもその内には入らずなどと、勝手に考えていたわたしにとっては些細なことかも知れぬが、実に意外な発言であった。更に魏氏は、跗人の表弟にあたる呉植三からも、上海において跗人は広智書局（『新小説』第2巻以降の発行所）の業務を補佐していた、との話を引き出している（箋注9）。

まだ外にも興味深い記述はあるが、以上のような点を含めて魏氏箋注が、呉跗人伝の不明瞭な部分を明らかにしつつあることは、我々外国人のなし得ぬことでもあり、貴重な資料を提供しているといえる。

また、魏氏箋注には、呉跗人の伝記に関わる記述以外にも興味深い点が多々あるが、いまわたし自身些か疑義をもつ二点のみをとりあげて、以下に述べることにする。

第一は、いままで跗人の作として存在は知られていたが、現在に到るまで未見の『胡宝玉』（署名は老上海）の一書が、実は既見の汪維甫編『我仏山人筆記』四種中の第四種「上海三十年艶迹」と同一内容のもので、汪維甫が跗人死後の1915年の出版の折に、『胡宝玉』より「上海三十年艶迹」に改題したにすぎない、と言及される点である（箋注17）。両書を比較検討のうえでの結論、という魏氏の注記はないが、当然魏氏は両書を比較したうえでこのように記したのであろう。なぜならば、『資料』下巻の作品部分「我仏山人筆記四種」の項にて「《上海三十年艶迹》はすなわち《胡宝玉》であり、わずかながら文字

に改動を加えている〈僅部分文字稍作改動〉(P255, 傍点中島)と、述べられていることからわかる。比較のうえでなければ、このようには書けないと思われるからだ。『我仏山人筆記』については、東京外国語大学諸岡文庫に1915年すなわち民国4年上海瑞華書局出版の汪維甫編原本が所蔵されているし、また最近では台湾文海出版社の「近代中国史料叢刊」第86輯としても出版されており、容易に見ることができる。「わずかながら文字に改動を加えている」にしても、「上海三十年艶迹」が『胡宝玉』とほとんど同一のものであるならば、我々は胡宝玉を眼の当たりにしながら、幻の『胡宝玉』を探し求めていたことになるといえよう。しかし、ここで些か疑問に思うのは、阿英の『小説閑談』(1936年良友版・1958年古典文学版共に)には、その発行について「光緒三十二年(1906)刊、発行者広内書蔵」(傍点中島、以下同)とのみ記すのに対して、魏氏は「光緒三十二年(1906)八月上海楽群書局出版」(『資料』P248)と記し「広内書蔵」とはないこと。また盧叔度氏「我仏山人作品考略」(『中山大学学报』1980年第3期収)中に「《月月小説》の発行者汪維甫編印の《我仏山人筆記》四種中、その第四卷《上海三十年艶迹》には、《花叢事物起源》・《胡宝玉小伝》・《北里変遷大略》・《上海游客之豪侈》・《上海花叢之笑柄》・《洋場陳迹一覧表》そして《上海已佚各報》の諸文を収める」とあり、篇目名としては我々の現見できる「上海三十年艶迹」中の後半の7項しかあげておらず、巻頭の「李巧玲」以下18項にわたる篇目への言及がないし、更に盧氏は「その内容は《胡宝玉》の一書とだいたい似ている〈其内容与《胡宝玉》書大致相同〉」とはいうものの「相異は繁簡と順序のみであり、《胡宝玉》の節本あるいは藍本とみなすことができる〈所異者繁簡和次序而已、故可視為《胡宝玉》一書の節本或藍本〉」と記していることからすれば、「上海三十年艶跡」と『胡宝玉』とは、とても同一の書とはみなし難く、これを先の魏氏の〈僅部分文字稍作改動〉との記述に比すならば、何ゆえ「《上海三十年艶迹》はすなわち《胡宝玉》である」と言えるのかという疑問が沸くのである。(尚、上述の論文において、盧氏も「上海楽群書局出版」とする)

さて第二は、迪齊訳述『盜偵探』22回および屢叟著、教育小説『学界鏡』4回未完の二作品が、魏氏によれば研人の作品ではないという点(箋注11)。こ

れら二作品は、阿英『晚清小説史』では呉趼人の作品として列挙されており、爾来我々も趼人の作として考えてきたが、魏氏の言に従えば「迪斉」および「履叟」の筆名は趼人のものではなく、ことに『学界鏡』は河北人の手になったものとし、阿英はいったい何を根拠にこれらの筆名を呉趼人のものとしたのかと、疑問を提示される。しかし、「迪斉」「履叟」の筆名が趼人自身のものにあらずという点については、魏氏の側の考えの根拠も明示されてはおらず、ただ「査考を経て」とのみ記されているだけである。だが、ただ「査考を経て」のみでは我々は納得はできない。これらの筆名が、趼人のものであるといわれてきたことには、現在その依拠したところは不明になりつつも、それなりの理由があつてのことだと思ひ、また、これらが趼人の作品か否かは、趼人の作品研究上少なからぬ影響があると思うからだ。魏氏には「『冰山雪海』是冒名李伯元編訳的假货」（『清末小説研究』第3号、1979.10）の如き論証を旨とされる論文がある。是非共、氏の「査考」の根拠を御教え願ひたいと切に望む次第である。

しかし、ここでふと思ひ到つたことがある。呉趼人の「又の名を宝震」と、魏氏は記す（箋注2）。これも我々にとっては未知の事実ではあつたのだが、既に李育中の「広東小説家雑話」（『隨筆』第1集 1979.6）中に言及され、また盧叔度「関于我仏山人二三事」（『中山大学学报』1979年3期）中にも見えることで、特に眼新しい事実というわけではない。だが、なぜかこの三者に共通することは、なぜ「宝震」としたか（李氏は本名とし、盧氏は原名とする）、その典拠を明示されていないことであつた。疑問に思つたのでこの点について、以前盧叔度氏におたずねしたところ、幸いにも「《呉氏族譜》により、呉趼人は“宝”という字派（一族同世代が名前に共有する文字・中島注）をもつことがわかつた。彼の早逝の兄の名は宝文、彼の名は宝震。宝文、宝震はともに呉氏一族の派名である。派名は、宗法社会では重要なもので“正名”“原名”といえる」との返書をいただき納得した。次いで『呉氏族譜』の書誌的問いあわせをしたところ、再び「わたしの見た《呉氏族譜》は光緒年間のものである。文化大革命以前には、この“族譜”を探し出すことも難しくなかつた。現在の状況は当時とは異つてしまつたので……」との御返事を得、現時では様々な事

情により、中国においてさえも資料探索がなかなか困難なことを知り得た。察するところ魏氏においても、また然りなのかもしれない。そういえば魏氏の箋注も、その依拠する資料は、ほとんど文革以前に集められたもののように思われる。

以上の箋注に続く李霞榮の「我仏山人伝」は、現在までの吳趸人伝記類の根幹をなすもの、しかし日本では見られる。また、魏氏名付けるところの同輩回憶録も貴重な資料である。周桂笙「吳趸人」、杜階平「談屑」、陳伯熙『上海軼事大観』中の記録は、共々日本でも見得るが、その他のものは索捜し難いと思われる。いま、それらの中から興味ある個所を二三示せば、徐枕亜は趸人が「極めて阿片を好んだ〈酷嗜阿芙蓉〉」と、趸人自身の作品や鄭逸梅の文章等で、いままで定説になっていた「吳趸人は阿片を憎悪していた」という一事に反することを述べているし、張乙廬は「趸人はビッコだったので、名を趸人に改めた」との珍説を出し、魏氏も些か困惑の呈を示しておられる。また、趸人の若い知友、許嘯天の「吳先生は生涯忠実な方であり、この万悪の社会の中では自らの意見も建白できず——当時、彼は小冊子をもっており《吳趸人哭》と名付けていたが、これは社会を咒詛した作である——小説界において建白し、果して今日の盛名を得たのである。他人は彼が小説家としての名を得たことをもって、彼のために喜ぶが、わたしには哀しいことに思われる」との言は、吳趸人を知るものの言葉のように思われ、記憶さるべきである。

上巻伝記部分は、『資料』全369頁中、僅か36頁。吳趸人の生涯にわたる事跡はいまだ雲の中との感もあるが、貴重な資料を提供して下さった魏氏には心より感謝する次第である。

下巻作品部分についても、書誌的あるいは新発見の資料と興味はつきないが、一部は既に上述したことでもあるし、以下簡単に述べておく。『二十年目睹之怪現狀』には「一九一六年上海新小説社石印本、四冊」が存在すること。未見作品『新石頭記』および新発見の『白話西廂記』の一部節録、『趸人十三種』の短篇内容の判明。『趸塵筆記』『我仏山人札記小説』『趸塵隨筆』『趸塵統筆』（未見）四種の篇目対照表を附されたこと、『海上名妓四大金剛奇書』の節録紹介も、有難い。ことに『海上名妓四大金剛奇書』については、周桂笙の息子

曾迭（周壬林）と、小説君なる人物との間で、果して胥人の作や否やとの論争があったとその経緯を簡単に伝える。これまた胥人作品研究のうえからも、両者の論争の仔細を知りたいところである。また、『海上名妓四大金剛奇書』の項の末尾に“按”として、“嶺南息影廬主”なる筆名は胥人と別人とあるが、これも上巻の如く明確な根拠の提示はなく、却って齟齬をきたす記述となっている。下巻において、わたしに最も参考になった資料は、上述の許肅天の言葉の中にもあった小品「呉胥人哭」の全文57則の掲載である。未知の資料でもあり、本格的に小説執筆にとり組む以前の彼の思想が語られている外、自らの過去の経歴も述べられており、この小品に関してはいずれ小文にまとめたと思っている。

最後に、魏氏のこの『資料』を通して感じたことは、中国といえども清末小説類の資料を参看することは、なかなか容易でないということである。日本では比較的容易に閲覧できる資料をも、（紙幅の関係上）短文に限られはいるが魏氏は丹念に再録しておられることから知られる。たとえば『鏡立社小説月報』取「剖心記」の全文再録（該報については盧叔度氏も見えていないようだ）や『月月小説』中の短篇類の再録等々である。これらは現在では、日本にて比較的容易に見られるものである。察するところ、日本での資料探索の方が却って容易なのかも知れない。

#### 附記)

以下に掲げた文献は最近の呉胥人関係のものである。但し『清末小説研究』第3号の拙編「呉胥人研究資料目録」中に掲げたものとは重複を避けた。

二十年目睹怪現狀集諺——中国諺語資料(8) 古屋二夫 『中京大学教養論叢』第18卷第3号 1977. 11

関于我仏山人二三事 盧叔度 『中山大学学報』(哲学社会科学版) 総72期 1979. 7

李、呉両墓得失記 魏紹昌 『鍾山』文芸季刊(南京) 1979年4期 1979. ?

呉胥人作品中的愛國和重科学思想 王延齡 『讀書』9 1979. 12

呉胥人研究資料目録 中島利郎 『清末小説研究』第3号 1979. 12

呉胥人「還我魂靈記」の発見 樽本照雄 『大阪経大論集』第133号 1980. 1

“芋香印譜”和《還我魂靈記》 魏紹昌 『齐鲁学報』1980年1期 1980. 1

呉胥人『恨海』の版本 中島利郎 『文芸論叢』第14号 1980. 3

『呉胥人研究資料』 魏紹昌編 上海古籍出版社 1980. 4

李伯元・吳趼人の墓 沢本郁馬 『野草』第25号 1980. 5. 1

吳趼人の曾鈔宛ての手紙のこと二つ三つ 林健司 同上

《二十年目睹之怪現狀》 徐波等編写『中外文学名著簡介』（吉林人民出版社）収  
1980. 5

二十年目睹之怪現狀与晚清的末世現象 林瑞明 『晚清譴責小説的歴史意義』（国立  
台湾大学出版委員会出版）第4章 1980. 6

吳趼人《二十年目睹之怪現狀》《痛史》 範真 『中国古典文学名著題解』（中国青年  
出版社）収 1980. 1

我仏山人作品考略——長篇小説部分 盧叔度 『中山大学学報』（哲学社会科学版）  
総76期 1980. 1

吳趼人 王俊年 『中国文学家的故事(二)』（中国兒童出版社）収 1980. 12

吳趼人の『俏皮話』について 麦生登美江 『野草』第27号 1981. 4. 20

吳趼人の笑いまたは『俏皮話』のこと 林健司 同上

我佛山人短篇小説考評 盧叔度『学術研究』1981年第4期 1981. 7. 20

〔尚、以上の他に刊本ではないが、陳幸恵『二十年目睹之怪現狀研究』（国立台湾大学  
中国文学研究所碩士論文 1975）が、複写製本されて通行している〕

（なかじま としを）